

# 「夢想兵衛 胡蝶物語」について

## 近世語研究（六）

深井一郎  
水持邦雄

### はじめに

本書は、曲亭馬琴作、歌川豊廣画になる読本九冊である。前編五冊（巻一―巻五）は文化六年、後編四冊（巻一―巻四）は文化七年の自叙（後編は序）を有する。なお、後編巻四末尾に跋文が存し、さらに「全本前後九冊、文化庚午発市」と印刻されている。<sup>註1</sup>活字翻刻が早く行なわれているが、今回は深井所蔵の版本を底本とした。刊記とおぼしい年月より後の刷りかと思われるが、版の磨減も少く、比較的刷りのよいものである。清濁・振仮名いずれも、概ね明瞭に見うるものである。表紙・綴・題簽ともに原装のままと考えられる。

内容は、発端に遊谷子の「和莊兵衛」<sup>註3</sup>にならった由を記している。遍歴体小説の一である。夢想兵衛といふ世を拗ねた漁夫が、一日、本牧沖で楫を枕に眠ると、浦島太郎が現われ、釣竿を与えらる。夢想兵衛はそれで大紙薦を作り、先ず少年国に渡る。この国は水子島・不教国・孝行島の三島に分れている。次で色慾国から強欲国に渡り禁酒論を唱へ、更に貪慾国に渡る。（以上前編）夢想兵衛は更に詐欺を事とする食言郷、煩惱郷、無常観にとらわれた哀傷郷を廻って歓楽郷に至り、国王に招かれて老荘の不可と儒教の行うべきを教えられ、舟で日本に帰れとすすめられるが、紙薦で

帰ろうとし海中に落ちたと思ったのは、本牧沖での夢であったという筋書きである。儒教による勧善懲惡の物語である。

作者曲亭馬琴は、姓は瀧澤名は興邦、後解と改めた。字は子翼・瑱吉、通称を佐五郎・佐吉・清右衛門という。著作堂主人・玉亭主人などの號がある。<sup>註2</sup>昭和四年六月九日生、嘉永元年十一月六日没、享年八十二。本書を書いたのは四十三・四才の盛年である。読本作者としては享和三年の「月氷奇縁」（復讐譚）によって文壇的地位を確保し、文化二年「椿説弓張月」、文化三年「墨田川梅柳新書」、文化五年「三七全傳南柯夢」、俊寛僧都島物語」と、傳説物を主とした中篇読本の傑作を出している。この後、本書及び「普語質屋庫」（文化七年刊・五冊）が書かれるのであるが、本書は、「普通の小説というよりは、著者の社会観を窺うに足る一種の評論と見るのが妥当」<sup>註5</sup>であり、「質屋庫」は「著名な歴史上の人物・事蹟を考證論評したもので、馬琴というよりは、読本の一面の性質の凝集された作品として見るべきものである」<sup>註6</sup>。この評論・論評という性格は、『儒仙老荘の学より諸子百家の一わたりを深くはなくとも広く汎く咀嚼した』<sup>註5</sup>内容と『措辞行文に苦心慘澹の跡を留め、寓意諷諭に工夫深刻の痕を遺している』<sup>註6</sup>表現をもたらしたと考えられよう。

いま、「胡蝶物語」に国語学的検討を加えようとするのは、次のような興味からである。

「わが胡蝶物語は、荒唐にしてその辞。いといたう俗たり。これを君子に呈らば。かならず卑しめて関すべからず。又世俗に呈らば。人情に悖れりとして。これも又取べからず。さればとて又これを。女子童蒙に呈らば。難解として巻を掩はん。もし夫君子の為に取られず。又世俗にも厭れて。女子童蒙に捨られなば。実にこれ無用の辨也。」

このように馬琴が巻末に述懐する如く、始めは通俗的に書こうとしたが、筆の進むにつれて理屈に墮したとするならば、その過程を追うのも一つの課題ではないかと考えるのである。たとえば、「今一言いうたならば。横そつほうを拳まげかねぬ面魂。ぐつと睨つけて。又莞然と笑ひ。お身さま野暮をいふものだけ。謡曲と香の物では酒が飲めぬと。古人錦考もいふたじやないか。況て生ながら。引導を。わたさる。やうな陳紛漢は。聞うちに酔が醒る。二百が亀朶を買はしめへし。をつへしるやうな理屈をならべて。さふいぶされてたまるものか。奈良茶屋の煮豆ではあるめえし。堅といつても大概があるもんだ。賢人でもへん人でも。貧者はねえ。潔く受て一盃飲つし。いやだといやあおれが敵手だ。くやししかあこ、へ出ろ。」(巻四)

この生酔の江戸言葉は、いかにも写実的であるが、この通俗性は、どの程度に持続するのか、また、様態を変ずるとすれば、どのような有様なのか。いかにも興味を覚えるところである。

「歡樂王かさねて。先生既にその紙鳶を獲て。飛行自在をいたすこと。いかなるゆえとしりたる歟。紙鳶は今何所にある。ころもとなし。と宣へば。夢想兵衛亦まうすやう。何の故とはしられど。斑輪が雲梯。墨翟が飛鳶に異ならず。乗れば必飛行しつ。又降れといふときは、この身をおろして。彼はそのま。虚空に沖り候也。」(後編巻四)

同じく会話の場面の描写である。相手が歡樂王と変っただけで、この叙述は、会話引用形式の前置と後置を具えた、伝統的な表現方法であると共に、使用される用語は、当時一般に通用の擬古文のそれである。

また、読本の特色の一つと見られるものに、漢語・音訓・和語にかかわる興味深い用法がある。詳しくは後に述べるが、これも関心の持たれるものの一つである。

以下、「胡蝶物語」に加えた国語学的検討の結果を、音韻(表記)・語法・語彙(とくに漢語)の順に記述することとする。

へに用例の存する巻数及び用例数を記した。又、漢語に付された振仮名は、必要な場合のみ(一)内に記した。

## 〔一〕 音韻 (表記)

本書に用いられる文字は、漢字と平仮名と、ごく少数の片仮名とである。漢字はおおむね振仮名を持つ。平仮名の用い方、即ち表記・仮名遣いを通して音韻の姿を望まねばならない。

### (一) 母音

近世では「かえる」が「かいる」に変わるように「エ」が「イ」に変わることがある。これは「エ」が「ア・オ」のあとに来る時起きるとされている。本書でも次の例が見られる。

○蝦蟇(かひる) (後 巻一)

○赤蛙(あかかひる) (後 巻二)

○譬ば(たとひ) (巻一・巻四2・巻五2)

○鋤て(きたい) (巻三)

また、これとは逆に「イ」が「エ」に変わる例が見られる。

○心得ちがへ (巻三)

○起揚れ小法師 (巻一)

○被られますま (後 巻一)

○よくお賢がでけました(後巻一)

一・三例はai↓aeで、前項の逆、類推による混用かとも考えられる。四例は、狂言などにも例があり、現在も、東北・北陸・近畿・中国・北九州と広い範囲で「デケル」の語形で用いられている。

なお、この外に、次の様な音変化がある。

○さげしむ(巻二)

u↓i

○すけなし(巻三、巻四、巻五、後巻三、後巻四)

u↓e

○いひくろめて(後巻一)

u↓o

○俯瞰(はれまぶち)(後巻三)

a↓i

○むじんに引裂たる(後巻四)

a↓i

○埋(うづま)れて(後巻三)

o↓a

○綻(ふくろび)(後巻三)

o↓u

また、仮名遣いでは「ゐ・ゑ・を」の中、「ゐ」と「を」は用法が限られており、「官位(くわんゐ)」「類聚国(るゐじゅこく)」「越度(をちど)」「和尚(をせう)」「をはします」は仮名遣いと合致する。

一方、「医者(ゐしや)」「をはします」は仮名遣いである。しかし、「ゑ」については、「末(すゑ)」「杖(つゑ)」「故(ゆゑ)」「遠慮(ゑんりょ)」はよいとして、「得(ゑ)て」「艶曲(ゑんきょく)」「塩谷(ゑんや)」「榮西(ゑいさい)」「益(ゑき)」「早贄(はやにゑ)」「英雄(ゑいゆう)」「洋々焉(ようゑん)」などは仮名遣いであらう。また、「酔(ゑは)ず」は「ゑふ」である。「ゑ」だけが仮名遣いの例が多いのは、どうした理由があるのであろうか。

## (二) 子音

まず、ハ行の仮名で特徴的なのは、「僅(はづか)」が十四例、すべて「はづか」となっており、他に仮名書きの「はづか」が一例存する。計、この語十五例すべてが、第一音節の仮名を「は」としている。実際の音価が、「ハ」であるはずはなく、「ワ」であると思われるが、例外なく「は」の仮名を使用したところは、何

等かの規範意識が働いていたものと考えられる。語中語尾のハ行の仮名遣いについては、次のようである。

○氷(こふり)(巻一・巻四)

o↓ふ

○倒(たふき)れて(巻二)

o↓ふ

○樗(あふち)の木(巻四)

o↓ふ

○郡(こふり)(巻五)

o↓ふ

○人をたふさぬと(後巻四)

o↓ふ

○遠(とほく)して(巻五)

o↓ほ

○仰(あほい)で(後巻二)

o↓ほ

○変更(へんがへ)(後巻一)

e↓へ

○酔(えは)ず(巻三)

wa↓は

○殃(わざはひ)(後巻四)

wa↓は

○檜皮葺(ひわたぶき)(後巻四)

wa↓わ

ついで、M音とB音との交替が次のように見られる。

○擇(えらむ)七例見られるがすべてマ行。

○墓所(むしよ)(後巻三)

wa↓わ

○萬物(ばんもつ)(巻四・巻五)

wa↓わ

○九子母神(きしぼじん)(巻二)

wa↓わ

○末座(ばつざ)(巻四)

wa↓わ

○憐(あはれぶ)べき(後巻三)

wa↓わ

四つ仮名については、概ね正しく使い分けられていると見られるが、次のような誤用が見られ、「じ」を「ぢ」とした誤りが目立つ。「ぢ」を用いる方が古形であるとの意識が働いたものかとも考えられる。

○草履をぢよじよといひ(巻一)

○ずぶとい(後巻二)

○上手(じょうづ)(後巻一)

○孔雀(くちやく)(巻二)

○浄(ぢやう)るり坂(巻三)

○不慈（ふちひ）〈巻三・後巻二〉

○慈悲（ちひ）〈巻三・後巻二〉

○辞（ぢ）せず〈巻四・後巻三〉

○雀舌（ちやくぜつ）〈巻四〉

○如蜜（ぢよみつ）〈巻四〉

○糕料味噌（ちんだみそ）〈後巻二〉

○脾腎虚（ひじんきよ）〈後巻二〉

○慈航（ちこう）〈後巻二〉

○虚辞（そらぢぎ）〈後巻三〉

### (三) 拗音

合拗音は、漢語を主として五五語（異なり語数）が見られるが、いずれも「クワ」の拗音表記をとっている。ただ一つの例外は、

○湯棺場（ゆかんば）〈巻五〉である。

また、拗音の直音化の現象として、次の例が見られる。

○旅宿（りよし）〈巻四〉

○衆生（しぜう）〈後巻二〉

○柄杓（ひさく）〈巻四〉

○毘沙門天（ひさもんてん）〈巻五〉

### (四) 長音

まず開合の問題について、同一語が開合両音表記をとるものは、次の通りである。（上段正）

○孝（かう）——孝行（こうこう）

○奇妙（きめう）——妙（みやう）

○香染（かふぞめ）——白龍香（はくりうこう）

○養生（やうぜう）——養生（ようぜう）

○珍宝（ちんほう）——調宝（ちやうほう）

○了簡（れうけん）——了簡（りやうけん）

○郷堂（きやうたう）——食言郷（しよくげんけう）

○光明（くわうみやう）——明年（めうねん）

○俠氣（けうき）——強俠（こうきやう）

○南陽（なんやう）——南陽（なんよう）

○黄老（くわうらう）——黄老（くわうらう）

約百七十語の開合に該当する語（異なり語数）に比すれば、この十一項は少いと言うことが出来ようか。もっとも、他に、開音表記であるが、正しくは合音と考えられるもの四十語、逆に開音を合音表記したもの六十五語、および、正しく開音表記したもの二十三語、合音を合音表記したもの二十四語（いずれも異なり語数）という状態で、開合は総体として正しく使用されていない。しかし、その用法を見ると、決して恣意的混用ではなく、判然と語別に規範意識は存在する。たとえば、「老莊」という作者の思想にあつて重要な語は、十二例すべて「ろうそう」（正しくはラウサウ）とか、「道」も種々の熟字の中にあつて、すべて「どう」（正しくはテウ）となつており、「生」「上」「正」なども数多の熟字の中において、すべて「せう」（正しくはシャウ）となつている。また、「朝」「調」も熟字中すべて「ちやう」（正しくはテウ）となつている。これらは開合の混用を見せることなく、誤った表記で統一されていることを見れば、作者の中には、このような開合の交替した規範意識が存したと考えるのが妥当ではなからうか。

次に、エ段長音（ai↓e）は次のような例があげられる。

○大概（てえげえ）〈巻四〉

○買はしめえし〈巻四〉

○あるめえし〈巻四〉

○貧著はねえし〈巻四〉

○わけのつかね恋病み〈巻三〉

また、ア段長音（「は」「ば」が上接音節と融合する）には次の例がある。

○諫（いさめ）にやならぬ〈巻二〉

○いやだといやあおれが敵手だ〈巻四〉

○くやし<sup>レ</sup>かあこ、へ出ろ<sup>レ</sup>〈巻四〉  
 ○朕<sup>レ</sup>(わしや)食言<sup>セ</sup>せずといへり<sup>レ</sup>〈後巻一〉  
 ○ありや戯<sup>レ</sup>でござんす<sup>レ</sup>〈後巻一〉

この両者はともに後期江戸語の特徴として知られるものである。<sup>註7</sup>  
 本書にあつては、巻四と後編巻一に集中して現われ、他所には一般的に見られない。両箇所とも、とくに江戸の人間を登場させているわけではない。

さらに、長音及び撥音・拗音の短音化の現象は、次のようにいくつか例を見ることができる。

○三両<sup>レ</sup>(さんりよ)〈巻一〉  
 ○人情<sup>レ</sup>(にんじよ)〈巻一〉  
 ○女房<sup>レ</sup>(にようば)〈巻二・巻三・後巻一〉  
 ○さうであろ<sup>レ</sup>〈巻二〉  
 ○融通<sup>レ</sup>(ゆづう)〈巻五〉  
 ○愛想<sup>レ</sup>(あいそ)づかし<sup>レ</sup>〈後巻二〉  
 ○現<sup>レ</sup>(げ)あるべしと<sup>レ</sup>〈後巻一〉  
 ○進上<sup>レ</sup>いたそ<sup>レ</sup>〈後巻一〉  
 ○醴<sup>レ</sup>(あまざけ)しんじよ<sup>レ</sup>〈後巻一〉  
 ○お誘引<sup>レ</sup>(さそひ)まうそ<sup>レ</sup>〈後巻一〉  
 ○梵<sup>レ</sup>(ぼ)さま<sup>レ</sup>〈巻四〉  
 ○無着<sup>レ</sup>(むちや)にして<sup>レ</sup>〈巻四〉

#### (五) 促音・撥音

字音の促音(入声音)を「チ」で表記するものは、「節前(せちまへ)〈巻一〉」「才発女(さいはちをんな)〈巻二〉」「別(べち)〈巻五〉」「唯一(ゆいいち)〈巻五〉」があるが、一方、実際は促音で発音されかと思われるものが、「墨客(ぼくかく)〈巻四〉」「六貫(ろくくわん)〈巻五〉」と表記されており、また「御厄介(ごやくかい)〈後巻一〉」「十把(じつは)〈巻五〉」「八百(はっぴやく)〈巻五〉」「やつはり<sup>レ</sup>〈巻一〉」「やつつかへしつ<sup>レ</sup>〈巻一〉」と、促音表記「つ」を用いたものも見られる。さ

らに、「一ッ」「三ッ」など漢数字の後に限って「ッ(小書き)」が数例見られる。なお、「ぶつ襲(かさ)ねて<sup>レ</sup>〈巻一〉」「搔(かつ)ほぢり<sup>レ</sup>〈後巻一〉」「引提(ひつき)げ<sup>レ</sup>〈巻五〉」のような促音接頭辞も見られる。

撥音は例が少ない。

○餘<sup>レ</sup>(あま)んの己惚<sup>レ</sup>(うぬぼれ)あり<sup>レ</sup>〈巻三〉  
 ○いやんな<sup>レ</sup>(言いやるな)〈巻四〉  
 ○紙袋<sup>レ</sup>(かんばんくろ)〈巻五〉  
 ○弟子坊<sup>レ</sup>(でしはん)〈巻五〉  
 (六) その他

目に付いたものを、一応あげておく。<sup>註8</sup>  
 「可愛<sup>レ</sup>(かわゆ)い子」〈巻一〉。「結髪<sup>レ</sup>(ゆひなづけ)」〈巻二・巻三〉。「燈火<sup>レ</sup>(とうしみ)〈後巻二〉。其所其首<sup>レ</sup>そんじよそこら」〈後巻一〉。「そんじよ楚国<sup>レ</sup>(そのくに)」〈後巻二〉。「生肖<sup>レ</sup>(せううつし)」〈後巻一〉。「数万<sup>レ</sup>(すまん)・数百<sup>レ</sup>(すひやく)」〈巻五〉。「人氣<sup>レ</sup>(じんき)」〈巻一〉。「屏風<sup>レ</sup>(へいふう)」〈巻二〉。「仮令<sup>レ</sup>(けれう)」〈巻三〉。「擁護<sup>レ</sup>(おうご)」〈巻四〉。「名言<sup>レ</sup>(めいごん)・言舌<sup>レ</sup>(ごんぜつ)」〈巻五〉。「巨萬<sup>レ</sup>(こまん)」〈巻五〉。「冥福<sup>レ</sup>(めうふく)」〈巻五〉。「戲言<sup>レ</sup>(げげん)」〈後巻一〉。「遺言<sup>レ</sup>(ゆいげん)」〈後巻三〉。「遊説<sup>レ</sup>(ゆうぜつ)」〈後巻四〉

#### (二) 語法

一般的に漢語が多用されることと相まって、漢文訓読調の文語文が多い。なかには、稀に口頭語と覚しきものや、会話文を部分的に包含しているが、これらは必しも多くはない。いくらか特色のあるものを以下に挙げてみる。

##### (一) 人称代名詞<sup>註9</sup>

各巻ごとに用いられているものをあげる。  
 〈巻一〉

- 自称 おれ わし われ 2 われら こち
- 対称 そち そなた 3
- 他称 渠（かれ）
- 〈巻二〉
- 自称 われ 10
- 対称 こいつ おぬし 6
- 他称 あれ かれ 2
- 〈巻三〉
- 自称 われ 5 おのれ わたし わらは 6
- 対称 おぬし 4 そもし 13
- 他称 彼（かれ） わろたち
- 〈巻四〉
- 自称 われ 5
- 対称
- 他称 彼（かれ）
- 〈巻五〉
- 自称 おら 3 おれ われ 8 われら 7
- 対称 貴様 貴公 汝 おぬし 2
- 他称 彼（かれ） 5
- 〈後巻一〉
- 自称 朕（わしや） わたし 僕（やつがれ）
- 対称 おまへ 4 其方（そなた） 4
- 〈後巻二〉
- 自称 われ 5
- 対称 おぬし 2 おん身 11
- 〈後巻三〉
- 自称 われ 7
- 対称 おん身 なんぢ 2
- 〈後巻四〉

- 自称 朕（われ） 2 われ 4
  - 対称 おん身 4
  - 他称 彼（かれ）
- 各巻ごとにあげたのは、種々の国を廻る主体は夢想兵衛一人であるが、相手はその都度変化するわけであり、使用される人称代名詞も大きく変動する実態を明らかにするためであった。登場する人物は、相互に身分上下を比較することは不可能であり、夢想兵衛の側からする敬意の存否も、必しも明らかではない。
- (二) 動詞
- 本書では、上二段・下二段の動詞は、「天道必盈（みつ）るを缺く」「他の物と名はつくれど」のように数は多い。また、「教（をしえ）ざるは」「教（をしえ）をしゆるは」「教（をしゆ）れば」〈巻一〉や、「手支（てつか）ゆれば」〈巻二〉、「換（かゆ）る」「抜かゆるには」〈巻三〉のようにヤ行下二段が見られ、さらに「身の屈託（くつたく）にとりあへねば」〈後巻二〉「人みなとりあへねば」〈後巻三〉という下二段動詞も見ることができる。
- 「拾（ひろ）はず」「拾（ひろ）ふて」「拾（ひろ）ふに」「拾（ひろ）へば」「拾（ひろ）へ」〈巻五〉と活用していると同時に「拾（ひら）ふべき」〈巻五〉という語形も見られる。
- 「載（のし）て」〈巻五〉「載（のし）たれば」〈後巻三〉と、「載（のせ）たる」〈後巻三〉と両方が見えるが、「送り帰らし給ふ」〈後巻四〉「舶に乘し」「人を乗し」「召のぼし給ふ」「漕越（こ）さして」「載（のし）たる」「帰らし給へ」「しらし給ふ」「休足（やす）して」〈後巻四〉というふうな、「し」となる用法が多い。
- 他に注目すべきものとしては、次のようなものがある。
- この三枚を御覧（ごらん）じすは〈後巻一〉
  - 耿（ふけ）らし〈巻二〉
  - 物おのおの得（う）たり〈後巻四〉
  - 此奴（こいつ）はよほどはなせると〈巻四〉

○舟を浮（うけ）るも水（巻二）

ついで命令形は次のとおりである。

○夏桃でもうつて見ろ（巻一）

○くやしかあこ、へ出ろ（巻四）

○手習せい学問せい刺縫せい（後巻二）

○頭を掉て置れい（後巻二）

○その梅俺にくれ（後巻二）

○おろしてくりやれ（後巻二）

○おた、きなさい（後巻二）

○お出なさい（後巻二）

○身上仕舞を見なさいな（後巻二）

○翌又（あすまた）（ぜ）へ（後巻一）

○さあござんせ（巻二）

○さあゆかんせ（巻二）

○通らっしやい（巻一）

○手を拍しやれ（巻五）

○さふいはしやれ（後巻二）

○恩按さしやれ（後巻二）

○好きなものを被さつせへ（後巻二）

○されば先聞つせへ（後巻二）

○見せにやらつせへ（後巻二）

○又行まはって来さつせへ（後巻二）

○ここへ出しや（巻一）

○一盃飲（のま）つし（巻四）

○腹はた、れな（巻三）

○さあ婆と去（いこ）といひかけて（後巻二）

○ゆるしてたも（巻二）

補助動詞として注目すべきものを次にあげよう。

○煮ておまそふ（巻一）

○ゆるしてたも（巻二）

○楽みくつさる（巻二）

○よしない事をしてのけた（巻二）

○さぞ朽をしかつたでござんせう（巻三）

○博物（ものしり）のいやるには（後巻二）

○いふてくださりまするから（後巻一）

○一張羅の単物をしてやられ（後巻二）

### （三）形容詞

注目すべき語形をあげるにとどめよう。

○貧乏人の子にふかしいことはいらぬ（巻二）

○入り日なれば甚大（おほ）きし（巻一）

○すさまじいけれど（巻二）

○山海經も妄誕（うそ）らし、（後巻一）

○可愛（かわゆい）けれど（後巻三）

### （四）助動詞

まず、時制の助動詞「つ・ぬ・たり・り」「き・けり」と「た」の使用数を巻ごとに見ると表のようになる。

	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	後巻一	後巻二	後巻三	後巻四
つ	0	2	1	2	4	1	0	4	6
ぬ	1	2	5	6	9	7	3	8	13
たり	35	56	65	48	57	51	41	50	90
り	3	8	3	20	27	10	18	26	27
き	11	25	69	44	38	45	31	26	49
けり	2	2	4	5	12	7	2	6	13
た	50	54	45	7	16	50	21	6	0
（計）	102	148	192	132	163	171	116	126	198

巻一・巻二における「た」の多用に比して、巻四、後巻三、後

巻四のすくなきは、際立っている。つまり、口語的要素の多少と正比例するところである。また、後巻三・後巻四及び巻五に「り」が多いのは「……といへり」「……せり」の多用によるものである。これは、文語調・説教調の文体の特色を示すものであり、本書の内容とも一致する。「たり」は、ほゞ一定に近い用法を見せるが、巻一においてのみ「た」より用例数が少く、後巻一もほゞ同量である。このことは、前後編ともに、出端は口語的な物言いに心懸けつゝも、次第に手慣れた文語調・説教調が表面化したことを物語っていることと見ることが出来る。

ついで、打消の助動詞は、「ず」「ない」「いで」が多い。

○ちつとは思ひやらしやらぬか〈巻一〉

○この三枚を御覧じずは〈後巻一〉

○水は寔に射べからず〈後巻一〉

○後に愚になつたでもなく〈巻二〉

○さうじゃないく〈巻四〉

○騾がそでないから〈巻三〉

○わけのつかね変病み〈巻三〉

○金を出すまいものでもなければ〈巻五〉

○孝行らしくもせなんだが〈巻一〉

○一度も被(き)なんだ〈後巻一〉

○身にあたらいでなんとしやう〈巻二〉

○おそれいでもの事に驚、哀(かな)しまでもの事を悼(いたむ)は〈後巻三〉

○樂はせざらいでなどと〈巻二〉

○涼(わな)にもかゝりはせまい〈巻二〉

○たしかな證據であるまいか〈巻四〉

○二百が亀朶を買はしめえし〈巻四〉

○奈良茶屋の煮豆ではあるめえし〈巻四〉

○「樂はせざらいで」などは奇妙な用法であるが、他に類例は見

えない。

さらに、断定の助動詞では「じや」と「だ」が併用されている。や、「じや」が多いと見ることができよう。

○よき衣着たやうじや〈巻一〉

○ちと引あはぬしろ物じや〈巻一〉

○昔はどうじやのかうじやのと〈巻一〉

○年日(としび)じやの血道じやのとて〈巻二〉

○身の破滅じや〈巻二〉

○騾(もうか)らぬの間(ひま)じやのといふ〈後巻二〉

○野暮をいふものだぜ〈巻四〉

○大概(てえげえ)があるもんだ〈巻四〉

○わたしは芝居が幅(はゞ)だから〈後巻一〉

「しやる」「さっしやる」はあまり多くはないが、次のように見える。

○ちつとは思ひやらしやらぬか〈巻一〉

○乗らしやつた〈巻一〉

○水を汲といはしやるから〈巻一〉

○手を拍(うた)しやれ〈巻五〉

○通らつしやい〈巻一〉

○誰ぞ見せにやらつせへ〈後巻一〉

○清く受て一盃飲(のま)つし〈巻四〉

○又行まはつて来さつせへ〈後巻二〉

「ます」も次のように少数ながら見られる。

○いかふ酔て拝あられませう〈巻四〉

○お療治を受ましたら〈巻三〉

○必お供をねがひます〈後巻一〉

○いふてくだりまするから〈後巻一〉

仮定表現は「なら」「たら」である。

○お手がなるなう銚子とは悟れども〈巻一〉



- 船幽霊なら柄杓がない〈巻一〉
- 指が落たらどうさしやる〈巻一〉
- 年をとつたらなほらふかと〈巻一〉
- 一ツ食ふたらはや腹に満て〈巻二〉
- もし為損じたら身の破滅じや〈巻二〉
- 一箸食たらえもいはれず〈巻二〉
- お療治を受ましたら夢の覚たるやうに〈巻三〉
- ちよとみたら井に四方の赤〈巻四〉
- めけたら正直正露にしかず〈後巻一〉
- 倦なさつたらこの夏の洗着にしやせう〈後巻二〉
- もしまちがつたら阿爺（おちい）をした、かおた、きなさい〈後巻二〉
- 帰つたら御亭主にさふいはしやれ〈後巻二〉
- 「ならば」は見られないが、「たらば」は集中に八例を見る。  
なお、他に次のような用例がある。
- 生垣にもわくものさうな〈巻二〉
- 恨（うらめし）しさふに〈巻五〉
- 下界へおりたいと思ふときは〈後巻二〉
- やりともない気になつて〈巻二〉
- 見ぬ物は猶見たがり、〈巻二〉
- 飛たがるやうなもの〈巻二〉
- ありや戯でござんす〈後巻二〉
- ありや戯でござんす〈後巻二〉
- この夏の洗着（あらひぎ）にしやせう〈後巻二〉
- 世の人も申上げな〈巻三〉
- 俳諧者流の滑稽可（こつけいべい）〈後巻二〉
- (五) 助詞 特色あるもののみを挙げる。
- 気が利（きい）たのに浮気多く〈巻二〉
- 八刃がものはあるべし〈巻五〉

- 捨ても五百がものはあるに〈巻五〉
- 連体格の「が」、「もの」と同義の準体助詞「の」の用例と見るが、用例はこれのみである。
- 併列助詞と見られるものが多様である。
- 昔はどうじやのかうじやのと〈巻一〉
- 年日じやの血忌じやのとて〈巻二〉
- 暎（もつか）らぬの間（ひま）じやのといふ〈後巻二〉
- 女護の島ほど女子をあつめ、弾せたり唄せたり舞せたりそべらせたり〈巻二〉
- やつつかへしつ〈巻一〉
- 口説つ泣つ〈巻一〉
- 見るにつけ聞くにつけ〈巻二〉
- 聞くやいなや〈巻三〉
- 男やら女やらみな髪をそりて〈巻二〉
- どうやらかうやら〈巻二〉
- 天狗やら熊鷹やら〈巻五〉
- 間（ま）がな隙（すき）がなと〈後巻二〉
- 理由を表わす接続助詞「から」が、次のように用いられている。
- はや心が動くからふりかへりつ、〈巻二〉
- 躰がそでないから縦内縁あればとて〈巻三〉
- 三世の春秋をおくるからをさをさ人にもしられし事〈巻五〉
- わたしは芝居が幅（は）だからいつ何時でもお出なさい〈後巻二〉
- いふてくださりますから御厄介になりませう〈後巻二〉
- この他、なお次のようなものが見られる。
- 太鼓も揆のあたつたやら〈後巻二〉
- 親父もどうやらやりともない気になつて〈巻二〉
- こ、へ出しや〈巻一〉
- 勘平は腹切て死だはい〈巻三〉
- おそれいでもの事に驚、哀しまでもの事を悼は〈後巻三〉

○地獄としりながら〈巻一〉

さらに、次のような用法も見られる。

○さふいぶされてたまるものか〈巻四〉

○大概(てえげえ)があるもんだ〈巻四〉

### 〔三〕 語彙

まず漢語について、次の三項の検討結果を記述する。(一)字音と字順 (二)漢字と振仮名 (三)二字漢語のサ変動詞化

#### (一) 字音と字順

まず字音についてだが、飛田良文氏の調査<sup>註11</sup>により、明治二十年前後に読みの変化する語が多くあることが明らかにされている。

近世後期における漢語の読みはどうであろうか。現在漢音で読まれているものが、呉音で表記されている例として(清濁の違いによるものは除く)次の二五語がみられる。

愛惜<sup>あいしやく</sup> 有用<sup>ゆうよう</sup> 貴人<sup>きじん</sup> 群集<sup>ぐんしゅう</sup> 快樂<sup>くわくらく</sup> 極所<sup>ごくしよ</sup> 巨万<sup>こばん</sup> 彩色<sup>さいしき</sup> 再発<sup>さいはつ</sup> 衆評<sup>しゅうへい</sup>  
 △尊敬<sup>そんけい</sup> △大望<sup>たいぼう</sup> △昼食<sup>ちゅうしょく</sup> △地形<sup>ちけい</sup> △男女<sup>なんによ</sup> △男色<sup>なんしき</sup> 忍辱<sup>にんにく</sup> 万物<sup>ばんぶつ</sup> △飛行<sup>ひこう</sup> △叛逆<sup>はんぎ</sup>  
 △凡人<sup>ふんにん</sup> 無色<sup>むしき</sup> 無益<sup>むえき</sup> 名言<sup>めいごん</sup> 融通<sup>ゆうつう</sup><sup>註12</sup>

語頭に○印の語は、「和英語林集成」<sup>註12</sup>に同じ語形で載っているし、△印の語は「書言字考節用集」にも同じ語形がある。これらはこの時代の一般的な読み方であり、語形変化は明治以降におこったものと考えられる。

「無益」「融通」は「書言字考節用集」では呉音の読みだが、「和英語林集成」には現代語と同じ漢音で記載されている。これは近世後期に語形変化がおこったとも考えられる例である。とくに「無益」は

○是無益の論なり。〈巻一〉

○且無益の費をもつて。〈巻五〉

というように、作品中に両方の語形が存在し、この時代に語形が

ゆれていた可能性がある。二つの語形がみられる例としては「万物」があるが、「万物」の一例に対し、「万物」と表記された例は四例あり、当時としては呉音読みの方が一般的であったのだろう。次に、現在呉音で読まれるものが、漢音で表記されている例として次の九語がある。

愛敬<sup>あいけい</sup> 化身<sup>くわんしん</sup> 和樂<sup>わらく</sup> 虚無<sup>きよ</sup> 人氣<sup>じんぎ</sup> 世情<sup>せいじやう</sup> 俗客<sup>さく</sup> 無為<sup>ぶゐ</sup> 餘情<sup>よじやう</sup>  
 このうち「人氣」は「和英語林集成」に同じ語形で記載されている。「虚無」は

○これより下は老子の虚無。〈後巻一〉

○しかるに虚無を尊むものは、〈後巻四〉

というように両語形がある。「愛敬」も

○善を植て愛敬せられ、〈巻五〉

○お嬢さんは愛敬もの。〈後巻一〉

のように両語形があるのだが、一見して明らかのように意味的な差異がある。「花柳春話」にもこの両語形があり、米川明彦氏は

『花柳春話』の漢音読みアイケイは動詞用法であり、漢籍の影響であり、日本語本来の読みや用法と異なっていると言える。

したがって、アイケイとアイキヤウは読みのユレではない。

と述べられている。この作品中の例も同様で、同一語に二つの語形が存在していたのではなく、語形(よみ)を異にする別の二語であると見るべきであろう。

清濁によって呉音、漢音が違うものから一例みておく。

○群集の男女は輾<sup>てん</sup>つ轉<sup>てん</sup>つ。〈巻三〉

○群集の中には。酔狂のものあり。〈後巻四〉

の「群集」であるが、先に示した飛田氏の論文によれば「群集」という形が表れるのは明治中頃であるが、この作品中にみられるのは興味深い。清濁の表記が必ずしも正確ではないとの判断で、語形の字音を調べる際に除いたのだが、清音で読むものに濁点をつけてしまったと考えるのも不自然だから、この読みも近世後期

に存在したのかもしれない。

連濁に関するもので特殊なものがある。

一騎当千 馳走 難所 無体 妄想

このうち「難所」「妄想」は「書言字考節用集」及び「和英語林集成」に同じ読みで記載されているが、「当千」「馳走」「無体」は先の二書ではいずれも連濁しない形しかなく、現在も清音で読まれる。それぞれの文字が結びついた熟字としてとらえ、連濁しても不自然ではないと感じる馬琴の意識があったのかもしれない。

現在「数」にあてられる「すう」という音はみられない。

数十人 数日 数百年 数万 人数

というように、いずれも「す」で読まれる。このうち「数万」「数十人」は「和英語林集成」に同じ語形で記載されている。「人数」は「書言字考節用集」「和英語林集成」ともに「にんじゅ」という形で記載されている。明治以降「すう」「ずう」という音で読まれるようになったのであろう。

次に、漢語を構成する字順について述べたい。現在と字順が異なるものに

彩色 操節 稚幼 療治

といったものがある。「療治」に関しては、佐藤亨氏の詳細な論究があり、

本邦において、「療治」は古くから用いられたが、特に室町時代頃口頭語の世界に及び近世末に至る。これに対し、「治療」は各時代に少しく用例が存するものの、「療治」の如く一般通用語となりえず、それは明治初期までまたなければならなかった<sup>註14</sup>と述べられ、「治療」は近世後半に中国医書を通じて広まりはじめたこと、「療治」に比べ語の新鮮さがあることが外的要因になっていることを明らかにされた。つまり単純に字順が交替しただけではないということである。ここにみえる「療治」は当時のごく一般的な語ということになる。

「彩色」は現在も用いられ、逆の形である「色彩」も現在使われるのだが、「色彩」の方は明治期よりも古い例がみられない。現在においては、「彩色」が「いろどること」「いろどり」という意味はもつものの「いろどり」を表すときは「色彩」を用いる方が多いように思う。「色彩」は、「大漢和辞典」をみても中国の用例がなく、明治初期に「彩色」の字順を変えることで、よりその語の名詞性を高めたものとして使われはじめたものとも考えられる。

「操節」は「みさお」という振り仮名がついていて、現在用いられる「節操」と意味的には変わらないと考えられる。「節操」は古くから使われているようだが、「操節」は明治期より古いものにはみられない。漢籍には「後漢書」に、「操節清白、有稱卿閭」という例がある。

「稚幼」は

○稚幼ときからこきつかひ。〈巻一〉

というように振り仮名があり、逆の形の「幼稚」も、

○人幼稚きときに。〈巻二〉

という形で作品中にみえる。「稚幼」は蘇軾の詩に「百歳仍稚幼」という例があるものの、日本ではおそらくあまり例のあるものではないだろう。しかし「稚」も「幼」も意味の似かよった字であるし、「書言字考節用集」をみても、ともに「いとけなし」という読みが記されている。佐藤亨氏は、近世前期の資料をもとに、字順が交替している語は同義並列の形のものが多くことも指摘されているが、この「節操」「稚幼」も、それぞれの字の意味が似たものであるから、字順が変っても意味の把握には何ら支障がなかったのである。これは、一字一字の意味がはっきりしているということでもある。

以上、語形について、明治以降変化していったとみられる語のそれと、の段階としての様相の一端をみる事ができる。

## (二) 漢字と振仮名

馬琴の作品には、漢字で表記された語に特殊な振り仮名をつけた例が多くみられる。振り仮名が特殊というのは、振り仮名が基本的には語の読み方を示すものであると考えた場合、馬琴の表記にはその働きを超えた振り仮名のつけ方があるということである。例えば、漢字の音読みでなく、安定した訓読みでもなく、語の意味を示す和語をつけたたり、振り仮名と漢字で表記された語の両方で意味を表そうとしたと考えられるものがある。そこでどのような語にどのような振り仮名がつけられているかを調べ、その関係から当時の漢語のとらえ方を探ってみたい。ただ、漢字で表記されている熟語の中には、必ずしも漢語と言えないものもあり、ここでは、これらを含めて「漢字語」ということにする。

まず現在でも用いられ、文章中にあれば字音で読まれ意味が理解される漢字語、つまり現代語における一般的な漢語をみてみよう。

「書言字考節用集」をみると、馬琴のつけた振り仮名と同じ形で出ているものがある。つぎの語である。

\*形勢 主人 \*闊評 誘引 \*何日 不審き 狼狽 \*燐火 \*中流  
\*阿々 医師 \*口実 \*魘語 誘引 彷彿る 当時 旅客 \*鶏卵  
\*邂逅 容易かる \*媒妁 餘波 \*暴風 \*流行 終日 故郷 \*火災  
迂遠い 向上る 御酒 織女 饗応 武士 紅葉 寡婦 往来  
する 桑門 尋常 世間 \*新婦

ここで見られる漢字語と振り仮名の結びつきは当時としては一般的なものであったのだろう。\*印を付した語は字音で読まれる形としては「書言字考節用集」にもみられないから、まだ日本語の中に漢語として根付いたものでなかったとも考えられる。いわば当時の熟字訓というところであろうか。

次に、字音で読まれる語として、「書言字考節用集」に載っているものに次のような例がある。

他国 気味 雷電 威勢 長寿 家臣 虚言 虚説 妄語  
流言 愁眉 行状 言行 書写る 堅固い 雷電 肢体  
爵禄 去年 布施す 奴婢 所為 貴賤 至宝 精神  
清談 平生 兵士 隣家 從者 愁眉 習俗 烏有 墳墓  
叢林 顛倒す 獨行 獨身 獄舎 書籍 風流 浴室 名譽  
真実 勅命 給事す 恩恵 衆人 神社 疲勞 世俗 世間  
春秋 衣冠

これらの語は字音で読まれても全く意味がわからないものばかりではないのだろう。作者としては語の意味をわかりやすくするために大体の意味を振り、また漢字語と振り仮名をあわせてより文脈のニュアンスを表わそうとしたものと考えられる。

○京邑の衣冠も。〈巻五〉

○清談を聞くことを厭ひ。〈巻五〉

という例などは「衣冠↓いくわん↓衣冠をつけている人↓都の偉人たち」「清談↓せいだん↓まじめな話↓ちんぷんかん」というように漢字語から振り仮名の意味までには飛躍がある。こういう振り仮名のつけ方は、漢字語そのものを意味をはっきりさせるのではなく、本来の意味を表すこととは違う別のことで漢字語のもつ概念を把握しなおし、振り仮名とあわせて面白みを出そうとしたものである。だから奇抜な振り仮名のついている漢字語は、その語が十分に使用され意味がわかつている方が奇抜さが面白みになる。よってこういう例の語には、却って漢語として十分定着しているものもあるといえる。

「書言字考節用集」にはみられなかったが、江戸時代よりも前の用例がみられる語に次のようなものがあり、馬琴は次のように振り仮名をつけ用いている。

悪口 冷笑ひ 逡巡す 疼痛 一頭 幼少 幼稚 夭折  
回答す 欺詐 歌曲 器械 甘美 法則 潤落 舞踏 不肖  
父兄 藥劑 法衣 僥倖 性質 善惡 酒盃 私語 三絃 品類

密会ひみつあひ 密落みつらく 調子てうし 棲息せいしつ 閨諱けんし 謝義しゃぎ 漁舟りゅうしゅう 漁船りゅうせん  
燈火とうか 富強ふきやう 燈火とうし 囚徒しうと 一室いつしつ 微笑びはう 貧弱ひんじやく 集會しふかい 眼前がんぜん  
中央ちゆうわう 全身ぜんしん 博物ぶつふつ 憔悴せうすい 憔悴せうすい 疾病じつびやう 凡庸はんよう 夜行やぎやう 所行しやうぎやう

意味的にみて漢字語と振り仮名がかけ離れてはいない。

○この故に幾人の。調落を救ひ得さしても。〈後巻二〉

○草木秋にあへば凋落。〈巻三〉

の「凋落」のように二種類の振り仮名がついているものがあるが、「凋落」はもともとこの二種類の意味をもち江戸時代よりも前から用いられているから、どちらの意味かはつきりさせる働きを振り仮名が担っている。「憔悴」も「やせ」「やつれ」と二種類の読みがあるが、和語としても意味は近い。

○他の善悪は見るめれど。わが善悪の見えざること。〈後巻四〉

この「善悪」と「さが」の結びつきはやや奇抜だが、直前の文章に「べら／＼と口をたたく。卑き性質なり云々」という部分があり、それをうけて「善悪の行い」とそのもとにある「人間の性質」を結びつけているという、作者の技法を感じるところである。

○城門三ツばかりを過るに。門下に器械ををかず。〈後巻四〉

の「器械」についている「うちもの」は、ここでは「兵器、武器」の意味だが、現在用いられなくなった意味でつかわれている例である。

江戸時代よりも前の用例がみられない語にはつぎのようなものがある。

敵手あひて 好景こうけい 形容けいよう 陶器てうき 花街けうかい 情人こひびと 幸福しあふ 奴僕しゆべ 教育きよういく  
寓言えげん 逆上さかあが 好意こうい 遺憾いげん 後妻こうさい 麻疹はしか 国字こくじ 実情じつじやう  
老実らうじ 迂遠いうえん 造酒ぞうしゆ 由縁よしづかり

この中には当時としては漢語としてそれほど定着していなかったゆえに振り仮名を必要としたものがあるかもしれない。

また用例が明治以降、つまりこの作品より後にしかみられないものをあげる。

○歩行あふぎやうこともならぬものもあり。〈巻一〉

○と、といへば魚貝ぎょかいを食せ。〈巻一〉

○とかく子ともは。外出しゅつともさせず。〈巻二〉

○縁故えんこを尋れば。〈巻四〉

○先祖の墳墓ぶんぼを再建。〈巻五〉

○本日そのひになれば音もせず。〈後巻二〉

○惚おろました。といふを妄言もうげんとはしりながら。〈後巻二〉

○この地方このちゆうの人は。〈後巻二〉

○新婦しんぷが姑おばあになるは夢の間。〈後巻三〉

○天地と寿命じゆめいを齊ひとしく一いつせんに。〈後巻三〉

○真まことにあはれな脚色けしきといふもの。〈後巻三〉

○立地たちどに走りつき。〈巻二〉

これらの語は漢籍に典拠をもつものが多い。「歩行」は「史記・項羽紀」に「下馬歩行」。「外出」は「南齊書張敬兒伝」に「不復外出」。「本日」は「福惠全書、教養部」に「本日早間司會者、將三報名冊上」。「妄言」は「史記、項羽紀」に「無妄言族矣」。「地方」は「晉書、孝懷帝紀」に「蒲子地方馬生二人」。「新婦」は「戦国策」に「衛人迎新婦」。「齊一」は「荀子」に「答桎暴聞、齊一天下」。「操節」は「一」で示したとおり、「生物」は「莊子」に「養虎者不敢以生物興之、為其殺之之怒也」というように用いられ、これらの語は振り仮名の意味と同じような意味と考えられる。「魚貝」「再建」は「大漢和辞典」に中国における用例がなく、日本製の漢語の可能性がある。

「脚色」は「朝野類要」に「初入仕、必具郷貫三代名銜家口年歳云々、謂之脚色」とあるように中国でのものともとの意味は「出仕する際の履歴書」を表す語であるが、ここでは日本で明治以降使われる「芝居の筋立て」という意味に近づいている。「縁故」も中国では一般に「理由」という意味で用いる語だが、ここでは現在の「ものごとの関係」を表す意味に近づいている。しかし本

来の意味と全く違うわけではなく、「履歷書」は中国におけるそれがどの程度のものであったかは知らないが、自分の経歴を語るときには多かれ少なかれ「脚色」があるだろうし、元明以後「俳優の役柄」という意味も中国で使われていることも関係があるだろう。「ものごとの関係」も、そのものごとのおこる「理由」を表すこともある。馬琴のような当時の知識人が、漢籍から得た語を文章中に本来の意味を応用し少し違った意味で用いて、それらが後の時代に応用の意味の方で用いられるようになったことも予想できる。

さきにふれた江戸時代よりも前から用例がみられるものは、既に漢語としてある程度定着していたと思われるが、江戸時代になつてからの用例しかみられないものや、今扱った明治以降に用いられていく語は、この作品の時代それほど定着していたと考えにくい。それだからこそ振り仮名で意味を示すことも必要だったかもしれない。そして馬琴のような教養人の用いた漢字語とその意味の関係が定着していき、それらが自然に字音でも読まれるようになって、明治以降漢語として一般的に用いられるようになったのであろう。幕末から明治初期にかけて翻訳語を中心として多くの漢語が使われはじめるが、その前段階としてこういう下地があることもおさえておく必要がある。

数個の漢字語に同一の振仮名のつくものがある。

- 「うそ」という和語が振り仮名となつていゝる漢字語に、「虚言」「虚説」「虚談」「虚文」「巧言」「欺偽」「欺詐」「浮誕」「浮文」「妄言」「妄語」「妄誕」「流言」の十三語がある。使われ方は次の通り。
- （「虚言」は卷之一、その他の例は全て後編卷之一「食言郷」）
- 寝ころんではなしせず。假初にも虚言つかず。
- 道家の虚説は、不老不死。
- 浮屠の虚説は、天堂地獄。
- 史傳記録に虚文多く。

- 又彼褒似が巧言つくや。
- 欺偽を諱たる虚文としらずや。
- 食言則欺詐つくこと。
- 大きな浮誕をつきたがる。
- かかる浮文ども数へ立なば。
- 惚ました。といふを妄言とはしりながら。
- 妄語つくことを第一の誠としたりといふに。
- 山海経も妄誕らしし。
- むかし管叔の流言つくや。

という具合である。一字の漢字に「うそ」と振り仮名をつけてある例としては、

- 譌の中にも真あり。〈後卷一〉
  - 實から出た虚なれば。〈後卷一〉
- がある。これらを見ると、共通に「うそ」と振り仮名をふつてあるものの、漢字語により微妙な意味の違いが意識されているものもあるようである。一字のものにしても、「まこと」と読む漢字とのつながりも考えているようで、作者の意識的な使い分けが感じられる。

擬声語や擬態語におもしろい例がある。

- 只阿唯々と應しかば。〈後卷四〉
- 可答々と快せしとぞ。〈後卷一〉
- 虚々と。長居せんは無益なり。〈卷四〉
- 驚き覚て岸破と起れば。〈後卷一〉
- そのまま乗れば閑々と。〈後卷三〉
- 銅臭呵々とうち笑い。〈卷五〉
- 忽地よせし老の波。〈卷一〉
- 夢想兵衛は莞然として。〈卷三〉
- 主の翁は莞爾とうち笑み。〈卷二〉
- 只管に身を売らん、と希ひしは。卷三

- 滅噫々々。と哭立られてとり逆上せ。〈後巻三〉
- 夢想兵衛は勃然として。〈巻四〉
- 努々疑ふ事なかれと。〈巻一〉
- 一步は高く。一步は低く跟々踏々として。〈後巻三〉
- これらのうち、「虚々」「莞爾」「只管」は「書言字考節用集」にも例がある。「莞然」は「吾書」に「莞然坐乗其弊」という例があるが、日本では明治より古い用例はみられない。「花柳春話」に「フロレンス忽ち莞然として曰く。」という例があり、明治以降使われ出したとみられるが、現代語の中に位置しているとも言い難い。「勃然」も「孟子」に「王勃然變乎色」とあるが、この意味では、「椿説弓張月」に「為朝勃然として大に努り」とあり、江戸時代よりも古い用例はみられない。「忽地」は王建の詩に「楊柳宮前忽地春」、「只管」は「近思錄」に「只管著他言語」というように中国での例がある。いずれにしても、これらは本文を読み下すより振り仮名を読んだ方が自然につながるから、文脈にあわせて「作者が自分の知識から漢字語を探したところどころだろか。また「岸破」という例は、明らかに字音を借りた当て字だろうが、「阿唯々々」「可笑々々」「滅噫々々」は、当て字的ながら、漢字の方も意味にあつたものを当てようとしている。
- 感動詞的なものを表す漢字語には次のような例がある。
- わるうきかれな嗚呼いたらぬぞや。〈巻一〉
- 可惜女房を若後家にして。〈巻二〉
- 其麼そふではあるまいか。〈後巻一〉
- 嗚呼「可惜」は「書言字考節用集」にもみられる。「其麼」は「新字鑑」によれば現代の中国語であるという
- 鳥に不及としり給へど。〈巻四〉
- 加之茶器を造るに。〈巻四〉
- 人の賢愚も亦如此なり。〈巻四〉
- の「不及」「加之」「如此」は、漢文の語順をそのままに用いたもの

- のだが、熟語として安定したものではない。振り仮名も漢文訓読の用語だが、こちらを読み下す方が自然である。
- 嚴殺之顔を解。〈巻五〉
  - 莫私手此との札を打ても。〈巻四〉
  - 孤弱幽滞も。〈巻五〉
  - 難発之口を開き。〈巻五〉
- というように、四字から成る一つづきの語に、まとめて振り仮名をつけた例もある。
- 振り仮名に漢語がつけてあるものに次の例がある。
- 縹致がよくて賢くて。〈巻二〉
  - 友だちと喧嘩して悪口盡を。〈巻二〉
  - はやとりかける校計口上。〈巻五〉
  - 疲労の講肆も。〈巻五〉
  - 相祿の貴賤も、みな錢あり。〈巻五〉
  - 彼三杜の神託などいふものにも。〈後巻一〉
  - 夕餐を二度食ふものもあり。〈後巻二〉
  - 小厮は主管の病身を羨み。〈後巻二〉
  - も早すれば。農夫は植つけならず。〈後巻二〉
- ここにみられる例は、わかりやすい語に殊更高尚らしい漢語を当てたと見られる。振り仮名で理解した上で、用いられた漢語に雰囲気を感じたものであろう。この振り仮名となっている語はかなり一般的に浸透しているものと考えられる。
- 漢字語とその振り仮名をみてきたが、現在普通に使われる漢語の源流を考えられるものもある一方、様々な振り仮名には作者の遊びごころや苦心も感じさせる。どれくらい読者層を作者が想定していたかも大きな関係があるだろう。ここに触れた例の他にもいろいろ注目すべきものがあるが、別の機会にしたい。
- (三) 二字漢語＋サ変動詞をとりあげてみよう。
- 現在もサ変動詞として用いられるものとしては次のものが

ある。<sup>註17</sup>（配列は五十音順とした）

愛惜 行脚 移転 運動 会釋 遠慮 横死 横領 介抱  
 学問 合戦 和樂 感激 還幸 勘定 勘忍 感佩 看病 感  
 服 帰国 寄進 帰伏 逆流 給仕 休息 禁酒 化現 懸念  
 喧嘩 後悔 建立 再発<sup>再</sup> 参詣 散乱 思案 自害 自殺 持  
 参 支度 出現 受納 周章 賞翫 情死 成就 招待<sup>招</sup> 承知  
 消滅 成仏 逍遙 信仰 吹拳 推参 推量 征伐 殺生 穿  
 鑿 掃除 退屈 談合 嘆息 着坐 注文 長坐 調進 聴聞  
 調練 珍重 通達<sup>通</sup> 読経 納得 日参 徘徊 判断 飛行 批  
 評 飛揚 服用 不足 扶持 分散 辟易 偏歴 奉公 本復  
 鉾盾 酩酊 問答 約束 遊歴 融通 遺言<sup>遺</sup> 用心 落城 乱  
 醉 和解 和睦

これらの中に、意味、用法の点で現在と異なるものがみられる。たとえば、

○もしその金をかいさらつて。隨徳寺へ移転されても。追ふことなれで。〈巻五〉

というように使われているが、この「移転」は「逃げ帰る」ぐらの意味で、人間の動作に「移転」が使われている。日本国語大辞典にも大漢和字典でもこの意味での用例はない。

○この故に。先哲これを和解して、<sup>国字に写し。</sup>〈巻五〉

の「和解する」は、用例中の「これ」が指すのは「聖賢の言」で、文字通り「和に解する」という意味に使われ、現在一般的に用いる「仲なおりする」「話し合いがつく」という意味とは異っている。

「和に解する」という意味では、「和解<sup>わけ</sup>」という形があり、これは江戸時代の作品に用例がある。「花柳春話」に、「和解」の形で「仲なおり」という意味で使われている例があり、本来は「ワゲ」「ワカイ」の語形と意味がそれぞれ結びついていたものの、幕末から明治初期にかけての語形変化の中で、その意味用法も混乱したと考えられる。

○実智者は。事理<sup>ことわり</sup>に<sup>ことわり</sup>通達して滞ることなし。〈後巻四〉  
 という例における「通達する」の「その道の深いところへ達している」という用例は現在ほとんど見られないように思われる。

○よくその身を運動するゆえに。酒によつて長寿なり。〈巻四〉

○春の蝶は、蜘蛛の網<sup>あみ</sup>を用心し。〈後巻二〉

のように他動詞的用法になっているものもある。

さらに、現代語としてはサ変動詞化が行われないものを、サ変に用いている例としては次のものがある。

一挙 異名 甘心 偽筆 好色 師範 捨身 親愛 舌戦  
 善根 相承 束帯 麤服 道中 便船 不興 腹痛 布施 模様 夜話

「親愛」「好色」は現在「親愛ナ」「好色ナ」というように形容動詞的に用いられるもの。「異名」「甘心」「偽筆」「師範」「捨身」「舌戦」「善根」「束帯」「布施」「夜話」は、体言として「ス」の客語となるもので「ラスル」とおきかえられ、これはサ変動詞の安定的な使われ方と思われるから、現在サ変動詞用法が行われないのは、それぞれの語の動詞性の意味が薄れている、あるいはもととそれがなくことに所以すると考えられる。

○帰る雁は。鷹に逢はじと道中す。〈後巻二〉

の「道中す」は「道中を過ぐす」という意味である。

○鶴亀の模様した。膳碗はありながら。〈巻二〉

の「模様した」は「模様が描かれた」という意味に使われ「ス」の部分<sup>なにか</sup>が担う意味が大きくなっている。

○俄に腹痛してむなしくなりぬ。〈後巻一〉

の「腹痛す」は体言が「ス」の主語になっているもので、この形のサ変動詞は極めて少ないと思われる。「便船」は「都合のよい船」ぐらいの意味で普通用いられるが、

○かくとしからばおかる戸南瀬等らに便船して。日本へ帰るべかりしに。〈巻三〉



という用例を見ると、「おかると南瀬とに便乗して船に乗る」という意味で用いられているようだ。

その他、現代においては体言部分そのものが使用されていない語でサ変動詞として現れるのは、次のような語である。

○鶴に乗て。大千世界を徜徉し。〈巻一〉

○死なぬつもりで大酒して。〈巻四〉

○酔せんとして。現化し給ふ酒の神。〈巻四〉

○これを飲めば。頭痛吐熱すといへり。〈巻四〉

○聖人は凝滞せず。〈巻四〉

○只戲謔すれども。虐をなさざるの微意。〈巻五〉

○男女の戀憐して。餘事を顧ざるを。〈後巻三〉

○酒に溺れて。頓せし與。

○よくよく執行し給へ。〈後巻三〉

○いまだ百世に芳流するものを見ず。〈巻五〉

○實朝社参し給ふ夜。〈後巻一〉

○佞媚せぬ記者稀なるに。〈後巻一〉

以上のようにサ変動詞としてかなり多くの語が用いられている。この用法が当時どれほど一般的であったかはわからないが、漢字一字一字の意味がよく理解されていたということにも原因があると考えられる。

ついで和語の分野であるが、まず巻一に32個に及ぶ「小児語」が列挙されているのが目につく。又「親の頭に松三本」「ち・んふい／＼ごよの御宝」「今どきの若い者」などの慣用句的な言辭が多く、語構成の面では「生——」が「生ものじり・生さとり・生すねもの」など十語に達する。また「おつべしよる」「かつくらひ」「ほかしこまれる」などの接辞も目につくところである。擬音擬態語も比較的多い。世俗語の類は随分多用されているが、詳細は他日を期したい。

## おわりに

この論文は、昭和六十年春以来、水持・深井の両名が検討してきたものの一応のまとめである。主たる分担は、音韻・語法を深井が、語彙を水持が受け持って記述した。さまざまな問題が山積しているが、今回は検討の結果の記述にとどまった。問題の解明はなお後に期することとする。

註1 岩波文庫本は、巻末に「東都書肆 両国米沢町三丁目 釜屋又兵衛板」と記しているが、底本とした本は「和漢西洋書籍賣捌處 大阪心斎橋博労町 群玉堂河内屋 岡田茂兵衛」となっている。東西の出版所の違いがあるが、本文内容は同種の版である。底本としたものは、裏表紙見返しに此書肆の名が刻され、この紙は一枚だけ、他の本文にある梓より上下各1cm、左右1cm程度小さい梓を持っており、後の付け加え（差し替え）と見られる。

註2 岩波文庫。近代日本文学大系。名著文庫。国民文庫。滑稽文学全集七。新釈日本文学叢書一。帝国文庫。曲亭馬琴翁叢書。

註3 半紙本八冊。前編四巻は「異国奇談」と角書し、安永三年刊。後編四巻は「異国再見」と角書し、安永八年刊。前編の作者は「南阿 遊谷子」とあり、後編は島観水の序に「爰に和莊兵衛といふて楽を寓言にして、人を悦しむる書先あり、今是にもれしを沢井何某のかい集て一部の書となる」とある。或は両者別人か。遍歴を小見出しに見れば、不死国、自在国、矯飾国、好古国、自暴国、大人国、（以上前編）清浄国、長足国、吝好国、大膽国、金銀宝玉国、交蛮国である。構想は、「風流志道軒傳」（宝暦十三年刊）に、知識は「華夷通商考」（元禄八年刊）・「和漢三才図會」（正徳五年刊）などによるものかと考えられる。なお、同種の書に、「異国風俗笑註烈子」（五巻・天明二年刊）・「東唐細見斬」（四巻・天明三年刊）・「和莊兵衛後日話」（三巻・寛政九年刊）・「和莊兵衛一代物語」（三巻・寛政九年刊）などがある。

註4 馬琴の号は多い。逸竹斎達竹・正徳馬鹿輔・乾坤一草亭・玉亭光蛾・大榮山人・蟬行山人・雷水山人・飯臺陳人・養笠漁隠・亭々亭・信天翁・魁番子・傀儡子・愚山人・彫窩坊・狂斎・鸛斎・閑斎・玄同・笠翁・寶民・鳥水・山摺貫洲・曲わの馬ごと（最後の二項は狂歌名）などである。

- 註5 岩波文庫「胡蝶物語」はしがきに記された和田萬吉氏の言である。
- 昨6 「江戸文学辞典」(富山房)、「昔語質屋庫」の項に記された輝峻康隆氏の言である。
- 註7 講座国語史2「音韻史・文学史」第三章 近代の音韻(外山映次)の二近代II、(二六〇頁・二六一頁)などによる。
- 註8 こゝに掲げたものは、一様ではない。和語・漢語ともに種々の問題を含むものと考えられる。なお底本以外の板本によるたしかめも必要であろうと思われる。いずれ稿を改めて検討を加える所存である。
- 註9 講座国語史4「文法史」第六章近代の文法II(江戸篇)(小松寿雄)に明和の人称代名詞が詳説されている。
- 註10 註9と同書五六五頁以下に記述されている。
- 註11 飛田良文「明治大正期における漢音呉音の交替」『近代語研究二』昭和四七年
- 註12 一八六七年の初版、以下全てこれによる
- 註13 米川明彦『『歐洲花柳春話』の漢語の語形』『国語語彙史の研究五』昭和五九年
- 註14 佐藤亨「近世の漢語についての一考察——「治療」「療治」をめぐって——」『国語学』第一〇六集
- 註15 佐藤亨「近世の漢語についての一考察」『国語語彙史の研究一』昭和五年
- 註16 他の例として、「幸福」「洪福」「白尻」に「さいはひ」、「実語」「実事」「精誠」に「まこと」、「勸解」「賠話」「勸辞」に「わぶ」、「吾儕」「吾黨」に「われ／＼」などもある。
- 昨17 「岩波国語辞典三版」にサ変用法があるかどうかを判断の基準とした。  
(昭和六十年九月十七日受理)